

主 日 礼 拝 順 序

(降誕節第1主日)

12月27日 午前10:15~11:15

司会 本城智子執事

前奏		阿部 恩兄
招詞		司 会 者
頌 栄	5 3 9 (起立)	— 同
主の祈		— 同
交読文	4 6 (黙21)	— 同
讃美歌	1 2 2 (起立)	— 同
聖 書	創世記23: 1~20	

(共旧32頁/初旧37頁)

教会祈禱		岩井牧師
合 唱		聖 歌 隊
説 教	「 交 渉 」	津田伝道師
讃美歌	Ⅱ 5 6 (起立)	— 同
献 金		— 同
頌 栄	5 4 2 (起立)	— 同
祝 禱		岩井牧師
応 唱		聖 歌 隊
報 告		本城智子執事
後 奏		阿部 恩兄

創世記22章にもとづく前回説教(抜粋)

アブラハムは、父親としては失格であるように思えます。前章では同じく自分の息子であるイシュマエルを、手放したくないと思いつつも、結局、妻サラの要求に負けて、荒れ野に追いやってしまいました。イサクとの関係については、彼のために一度祝宴を催した以外はこれまで特別、父子の良好な関係がおしはかれることは書かれていません。あの強いサラの子どもですから、きっと彼女の影響力の方が勝っていたのでしょう。そして、今回旅立つときも、イサクと2人きりになることに耐えられず、他に若者たちをつれて行かなければならなかった。

なんとなく現代の私たちの親子兄弟や家族の関係と共通するものがあるように思いませんか。

そう考えると、5節で、アブラハムが付き人を待たせて、イサクと2人っきりになったのは画期的なことだといわねばなりません。はじめて、父と子、人と人との1対1の関係が始まったのです。さて、それはどんな関係なのでしょう。

6節。アブラハムは、捧げ物を焼く薪をイサクに背負わせました。自分は捧げ物のための松明と首を屠る刀を持ちます。そして、2人は一緒に歩いていったとあります。この部分は、人間の機微を鮮かに描いていて深いところだと思います。父と子がはじめて一緒に肩をならべてあるき始めた。しかし、その時彼らがかかえていたのは薪と松明、刃物。すなわち子どもを抹殺するための道具だった…。

7節でイサクが聖書の中で初めて声を発します。「わたしのお父さん」。わたし

の愛するお父さん、というのです。いままさに殺さねばならないわが子から、はじめて聞く言葉が「わたしが愛しているお父さん」とは…。アブラハムは、驚き、動揺します。

「ここにいるよ。わたしの子よ」。「ここにいる」とは、先ほどの1節で神様に向かって「ここにあります」といった言葉の強調形が使われています。神の前で虚心にしたがったのと同じ様に、いやそれ以上に、今、アブラハムは、息子の前で始めて、自らを無心にさらけ出すことができつつあったのです。にも関わらず、当初の計画は無情にもどんどん先にすすんでいきます。8節。イサクは無邪気に尋ねました。「火と薪はあるが、肝心の捧げ物はどこですか」。こんなとき、神様の名を出して答えることはいかに無責任かということは、きっとアブラハムが一番よく知っていたでしょう。けれども、そうするしかありませんでした。「それはなあ、神様が用意してくださるのだよ」。

読者のこんな声が聞こえてきます。「嘘つき!」。その通りでしょう。しかし、8節に2人はそれでも「一緒に歩いて行った」と再び強調されています。嘘も、そして新たに芽生えつつある愛も、刃物も、薪も、まとめて背負って、とにかく2人は一緒に肩を並べて歩いて行く。私は、この物語の作者は、親子の関係を、現代にもまったく通用するようリアリティーをもって描いているなあと関心いたします。これが親子の、そして、人と人との現実の関係ではないでしょうか。現実とは、それでもとにかく、「一緒に歩いて行く」しかないのです。

(津田記)